

下顎智歯と過剰歯によると思われる融合歯の一例

池嶋一兆 田代俊男¹ 鈴木陽典²

The Case of Fused Tooth Consisting of the Mandibular Third Molar and Supernumerary Tooth

Katsuyoshi IKESHIMA, Toshio TASHIRO¹ and Yosuke SUZUKI²

Abstract : We report a rare case in our clinical experience of fused tooth consisting of the left side mandibular third molar and supernumerary tooth in a 49 year old female. An operated specimen had two crowns and fused every three hard tissue of a tooth. By the X-ray photo findings, it had a jointed pulp cavity in coronal part but separated two canals in root part. In these seventy years, only 39 cases (including one case occurred on both side of mandibular and our one case) of fused tooth consisting of third molar and supernumerary tooth were reported, and it seemed our case was rare.

Key words : fused tooth (融合歯), mandibular third molar (下顎智歯), supernumerary tooth (過剰歯)

緒 言

複数の正常な歯胚が、その形成期において結合した歯牙は融合歯と定義されており¹⁾、現在までに多数が報告されているが、そのほとんどは前歯部に発生し臼歯部でのものは少なく、特に過剰歯と臼歯との融合例は稀とされている²⁾。今回著者らは左側下顎第3大臼歯と同部過剰歯による融合歯の一例を経験したので、その概要に若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患 者：49歳，女性。

初 診：平成14年10月29日。

主 訴：左側下顎第3大臼歯部の違和感。

現病歴：数日前より左側下顎最後臼歯部に違和感を覚え、知人の勧めもあり、精査を希望されて来院した。

既往歴：特記事項なし

家族歴：特記事項なし

現 症：全身的な問題は認められず；顔貌は左右対称であった。口腔内においては左側下顎第2大臼歯の遠心やや頬側部に半埋伏の状態、萌出している近心部に充填処置が施された第3大臼歯が確認できた。同部周囲の歯肉には急性炎症症状を思わせるような所見は認められなかった。デンタルX線写真では、図1のように若干大きめの歯冠を有し、歯冠近心部にレントゲン不透過性の充填処置を受けたやや遠心に傾斜して半埋伏状態を呈する第3大臼歯が認められた。

処置および経過：半埋伏智歯の臨床診断名のもと、同年11月5日に外来局所麻酔下に抜去術を施行した。患歯が判断以上に巨大であった為に遠心切開を延長したものの周囲組織との癒着や被膜の存在などの所見は認められず、一塊として摘出可能であった。術部よりの異常出血も認められな

受付：平成17年3月11日，受理：平成17年4月6日
奥羽大学歯学部附属病院，
奥羽大学歯学部診療科学講座
奥羽大学歯学部放射線診断学講座

Ohu University Dental Hospital,
Dept. of Therapeutic Science, Ohu University School
of Dentistry
Dept. of Radiology and Diagnosis, Ohu University
School of Dentistry

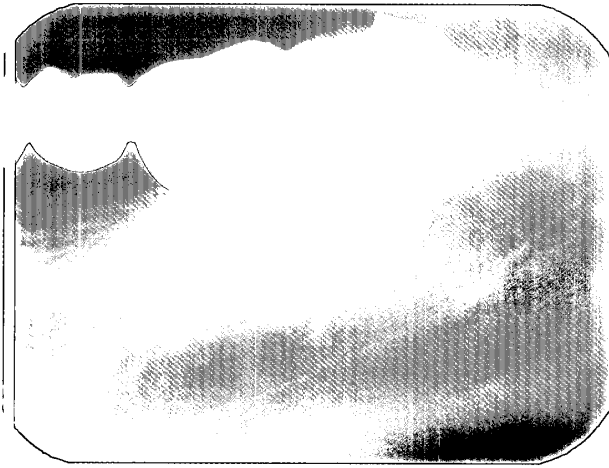


図1 初診時デンタルX線写真

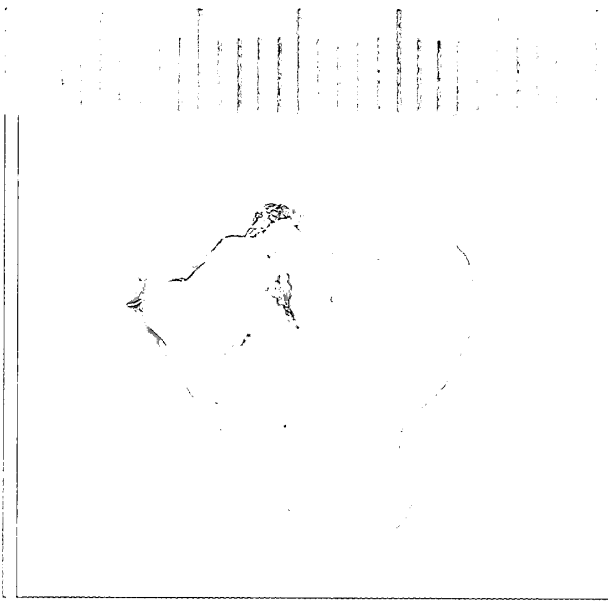


図2 摘出物頬側面観

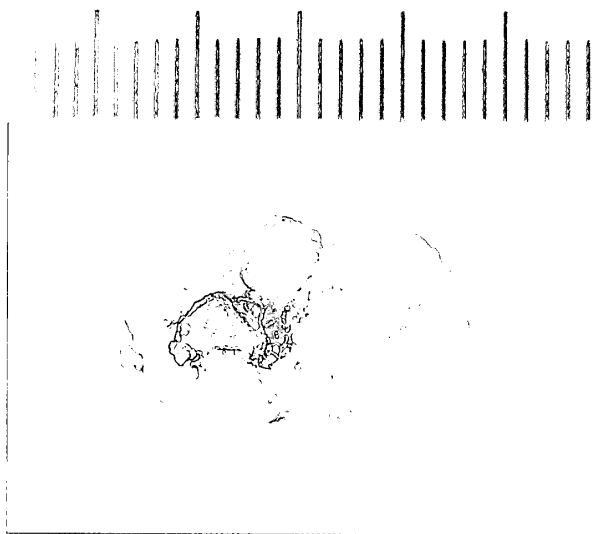


図3 摘出物咬合面観



図4 摘出物X線写真(頬側面観)

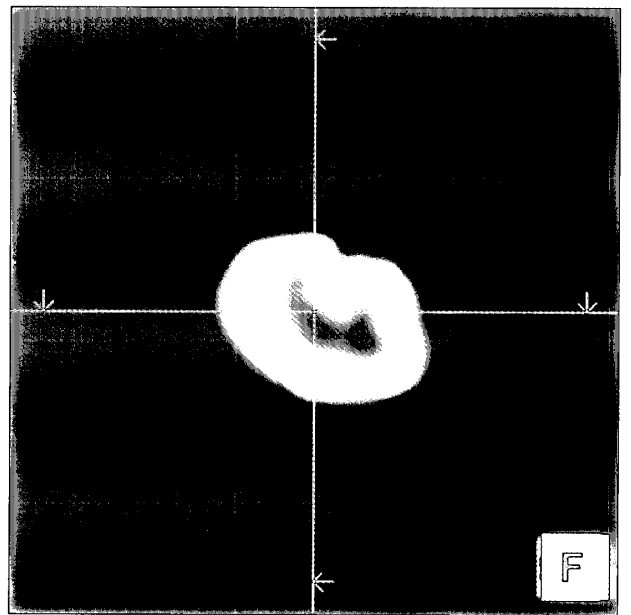


図5 摘出物CT写真(歯冠部)

ったため、術創は縫合により完全閉鎖した。術後は順調に回復し、一週間後に抜糸した。腫瘍の可能性も考慮し、比較的長期間の術後観察を行ったが、再発などの傾向は認められず以後の経過は良好である。

摘出物所見

肉眼的所見：摘出物は歯根強彎曲を認めるものの、ほぼ正常な形態を有する2個の歯牙が、硬組織各部分で結合してV字形に融合した形態を呈しているように見えた。萌出していた部分には近心隣接面と咬合面の2箇所アマalgam様充填物が確認できた(図2, 3)。

X線検査所見：歯冠部に一つの歯髓腔とそれに連続する二つの根管腔が認められ、根先部で

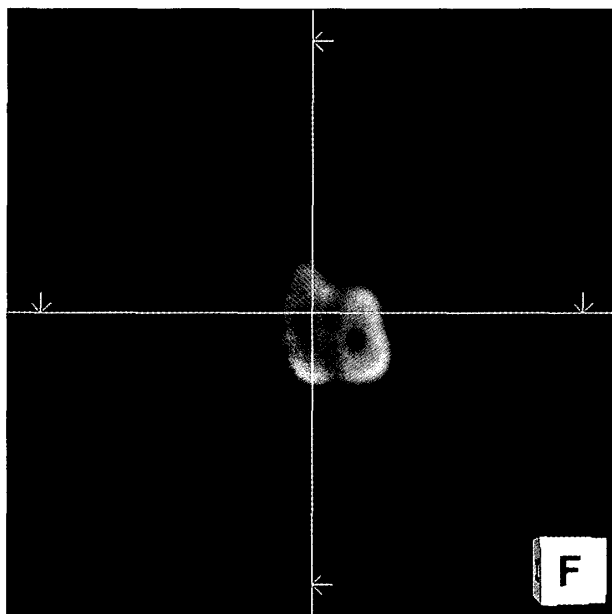


図6 摘出物CT写真（歯根部）

遠心側に彎曲しながらそれぞれの根尖孔に連続している（図4）。また、歯牙のCT写真を見ると、歯冠中央部では歯髓腔を共有している（図5）が、歯根部では2根管腔が明確に確認できる。さらに、両根管腔間に線状のX線透過性の僅かに高い部位が認められ、融合部を示す境界線と考えられる（図6）。

考 察

石川ら¹⁾は、複数の歯胚が形成期において結合した歯牙を融合歯と定義し、その発生原因としては外力などの局所的機械的因子をあげている。一方、三好ら²⁾は常染色体劣性遺伝など遺伝的因子の関与を指摘しているが、いまだに明確な結論は得られていない。また、複数の歯牙が結合したもののうち各々が象牙質を形成した後にセメント質のみで結合したものは癒着歯として区別され、発生機序は2個の歯牙が近接状態にあり、根尖部の炎症刺激によるセメント質の肥厚の結果としている¹⁾。

1934～2004年までの70年間において、著者らが検索し得た智歯と過剰歯の融合歯に関する本邦における報告は自験例も含め39症例^{3)～35)}（下顎両側症例1例を含む）であった。文献的に解析が可能であった症例においては、性別では男性：21例、

女性：11例と、男性にやや多く認められ、年齢は21歳から66歳までで、平均年齢は26.7歳であった。部位別では、左側下顎智歯に発生した融合歯が最も多く12例で、以下左側上顎：11例、右側下顎：8例、右側上顎：7例であった。また、上顎：下顎＝18：21と差異は認められなかったが、右側：左側＝15：24と若干左側に多い傾向が見られた。結合部位別では、象牙質とセメント質での結合症例が15例、歯牙三硬組織での結合は10例で認められた。

融合歯の結合状態としては、エナメル質と象牙質、象牙質とセメント質あるいは歯牙三硬組織におけるものがあげられるが、今回の症例のように歯牙三硬組織での結合例は少なく、2個の歯牙は歯胚形成期の初期において結合したものと考えられた。

住谷³⁶⁾は、融合歯の発生率は乳歯において高く、永久歯における発生頻度は0.3%弱と報告し、蜂須賀^{37,38)}は、双生歯や今回の症例のような過剰歯同士の融合歯発現頻度はさらに低く、0.11%と述べている。また、発生部位に関して石川ら¹⁾は、前歯部に見られるものがほとんどであるとし、その理由を歯胚発生の時期や位置の近接にあるとしている。

融合歯との鑑別診断としては、歯牙腫、骨腫、骨肉腫などがあげられ、特に複雑性歯牙腫との鑑別は困難であるが、本症例では初診時のX線写真と、手術時に周囲組織との癒着が認められなかったことや、摘出物周囲に被膜の存在が認められなかったなどの手術時所見および摘出物の肉眼的・X線写真所見より智歯と過剰歯による融合歯とした。

結 論

下顎智歯と過剰歯によると思われる融合歯の一例を経験したので、症例概要に若干の文献的考察を加えて報告した。

文 献

- 1) 石川梧朗, 秋吉正豊: I. 歯の發育異常. 口腔病理学 I. 第2版; 15-19 永末書店 東京 1990.

- 2) 三好作一郎, 国松仁志, 佐藤敦子: 永久歯の癒合歯の特徴と遺伝性(抄). 歯基礎誌 36; 97 1994.
- 3) 山本義茂: 大臼歯部に発生せる過剰歯の十八例. 新歯科医誌 209; 2-8 1934.
- 4) 川西兼敏: 希有なる下顎智歯過剰歯の一例. 歯科月報 18; 610-617 1938.
- 5) 斉藤新典: 下顎智歯と過剰歯との一胎形成. 口腔科学 7; 645-650 1939.
- 6) 石天泰三: 下顎智歯と癒合せる過剰歯の一例・臨床歯科 12; 997-1002 1940.
- 7) 北村勝衛: 人類第四大臼歯発現に就いて. 成医学会誌 60; 229-238 1941.
- 8) 大石勝人: 下顎智歯と癒合せる過剰歯の一例. 歯科広報 2; 7-8 1941.
- 9) 竹松正雄, 三木忠俊: 上顎大臼歯における双胎歯を観察す. 日口科誌 35; 9 1942.
- 10) 竹松正雄: 5根並にエナメル滴を有する上顎智歯と双胎形成をなせる異常歯牙について. 日口科誌 35; 47 1942.
- 11) 滝本正一: 咬面に中央結節を有する上顎第3大臼歯埋伏癒合歯の1例. 日口科誌 36; 26 1943.
- 12) 大竹敏治: 興味ある智歯に癒合している過剰歯の2例. 歯科学雑誌 7; 127-129 1950.
- 13) 菊池美彦: 両側性に出現した下顎智歯と過剰歯の癒合によるしゅう隻胎歯の一例. 歯科学報 53; 564-568 1954.
- 14) 成川誠義, 南直臣, 堤隆三: 下顎の智歯と過剰歯とが癒合し, エナメル滴をともなった一例について. 歯科医学 17; 47-49 1954.
- 15) 平野清孫: 上顎智歯と過剰歯第四大臼歯の癒合による双胎歯の一例. 通信医学 11; 511-512 1959.
- 16) 中田実, 田川清, 福井勝男: 下顎臼歯部の興味ある癒合歯の2例. 臨床歯科 244; 37-41 1964.
- 17) 打田定夫, 帆波英至, 宮田末吉, 岩崎行男ほか: 上顎左側臼歯部に現れた三歯癒合並びに第五打大臼歯と推察される希有な過剰歯の一症例. 臨床歯科 250; 19-24 1965.
- 18) 岡光夫: 上顎智歯部に見られたDens Invaginatusの1例(抄). 日本口腔科学会北日本地方会 付; 634 1968.
- 19) 池田治美: 上顎左側智歯部に現れた過剰歯の1例. 広島歯誌 2; 9 1969.
- 20) 久野吉雄, 松井日出雄, 堀田祐二, 永沼一広ほか: 下顎第3大臼歯部に於ける癒合歯と思われる三例. 日口外誌 16; 194-199 1970.
- 21) 北島正, 古賀賢三郎, 池畑正宏, 服部孝範ほか: 上顎左側第3大臼歯後上方に見られた埋伏過剰癒合歯の1例. 日口外誌 20; 184-186 1974.
- 22) 三輪純吉, 吉岡尊治, 藤岡品雄, 生田輝久ほか: 過去6年間に経験した癒合歯について. 広島歯誌 3; 43-48 1975.
- 23) 吉岡敏雄: 上顎小臼歯の頬・舌側に過剰結節をもち, 智歯の遠心側に過剰歯が癒着した1例について. 日口科誌 27; 108-115 1977.
- 24) 高德松, 服部千秋, 志水と弘, 豊田裕介ほか: 下顎両側に埋伏する第4大臼歯の1例. 城歯大紀要 6; 429-433 1977.
- 25) 西嶋克巳, 長島駿一郎, 西本全允: 第3大臼歯と過剰歯との癒合症例. 歯放 18; 305-306 1978.
- 26) 北村博則, 西川純雄: いわゆる第四大臼歯の発現部位と形態: 智歯の重複と癒合の可能性. 神奈川歯学 19; 407-417 1985.
- 27) 川辺建三, 泉廣次, 萩原敬久, 山本浩嗣ほか: 下顎大臼歯部にみられた過剰歯(臼後歯). 日大口腔外科学 11; 273-275 1985.
- 28) 戸塚盛夫, 福田容子, 小川光一, 武田泰典ほか: 下顎第3大臼歯と第4大臼歯の融合の一例. 岩手大歯誌 11; 37-41 1986.
- 29) 船越正夫, 黒田政文, 板垣光信: 上顎第3大臼歯と過剰歯との融合の1例. 岩手大歯誌 3; 173-176 1988.
- 30) 姜美玲, 佐藤廣, 瀧川富雄, 小野正道ほか: 智歯部に生じた埋伏癒合歯の2例(抄). 日口外誌 36; 2999 1990.
- 31) 吉田タマミ, 佐藤廣, 瀧川富雄, 寺門正昭ほか: 大臼歯部に見られた癒合歯の3例(抄). 日口外誌 37; 2196-2197 1991.
- 32) 内田憲治, 佐藤廣, 瀧川富雄, 小野正道ほか: 大臼歯部にみられた癒合歯の3例(抄). 日口外誌 39; 1492 1993.
- 33) 高橋正志, 根橋克明, 武田幸彦, 加藤譲治ほか: いわゆる上顎第4大臼歯と第3大臼歯の癒合歯の形態と組織構造について. 日口科誌 43; 177-184 1994.
- 34) 鈴木孝裕, 新田康隆, 清水良央, 熊本裕行ほか: 上顎智歯部の奇形歯の1症例. 東北歯誌 18; 159-165 1999.
- 35) 中西弘樹, 野村城二, 柳瀬成章, 長井講有ほか: 上顎智歯と過剰歯との融合歯の1例および本邦における文献的考察. 日口診誌 17; 217-220 2004.
- 36) 住谷靖: 日本人における歯の異常の統計的観察. 人類学雑誌 67; 215-233 1959.
- 37) 蜂須賀正雄: 双胎歯に就いて. 日歯学会誌 33; 117-127 1940.
- 38) 蜂須賀正雄: 双胎歯に就いて. 日歯学会誌 33; 160-179 1940.

著者への連絡先: 池嶋一兆, (〒963-8611) 郡山市富田町字三角堂31-1 奥羽大学歯学部附属病院
Reprint requests: Katsuyoshi IKESHIMA, Ohu University Dental Hospital.
31-1 Misumido, Tomita, Koriyama, 963-8611, Japan